慶長会津大地震

慶長十六年（一六一一）八月二十一日

石田明夫

「地震直後に本田の本泉寺が建てられる」

慶長十六年（一六一一）八月二十一日午前八時頃
マグニチュード六・九～七・二
震度六強と推定
死者約三千七百人
約二万戸倒壊

（一九八七年宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』・一九八七年寒川旭『慶長十六年会津地震による地変と地震断層』）

会津盆地西縁断層帯が震源。『塔寺八幡宮長帳』からすると河沼郡柳津町から大沼郡三島町滝谷にかけてが震源地。

天守閣も傾き、黒色七層から白色七層に改修さりますが、傾きは収まらず、加藤時代に白色五層に建て直されます。

当時の藩主

再蒲生時代

二代目秀行（ひでゆき）

当時の石高六十万石

治世十年間、文禄四年（一五九五）～慶長十七年（一六一二）

会津若松市館馬町の弘真院に墓所があります。

（建物は県指定文化財、市史跡）

赤べこ誕生

虚空蔵堂は『揚津秘録』に「元和三年（一六一七）秀行公の室・徳川家康三女振姫よって再建」と書かれています。その時「赤牛」が手伝い「赤べこ」が誕生します。昭和二〇年代まで会津に赤牛はいて、「朝鮮べこ」とも言いました

地震によって、若松城天守閣が傾き、喜多方市の熊野神社が倒壊し、岩沢集落が土砂に埋まっている。会津盆地の日橋川出口には、山崎新湖が出現。十三集落が水没したとされます。水が無くなるまで五十年以上を要しました。大きさは、約十五平方キロ。裏磐梯の桧原湖一〇．八三平方キロより大きかった。

本田「井出山本泉寺」は地震直後に創建

本泉寺は『新編会津風土記』によると、慶長十六年に「行運」が草創し、「本尊不動客殿に安ず」とありますが、享和元年（一八〇一）十月七日に焼失『家世実紀』したため本尊が大日如来となりました。真言宗豊山派。地震で別の場所にあった寺が倒壊し、新たに建てられたものです。

地震で倒壊した喜多方新宮 熊野神社

『旧事雑考』によると天喜三年（一〇五五）に会津若松市の熊野堂に建てられますが、康平五年（一〇八九）に本宮は喜多方の岩沢、新宮は新宮へ、那智は熱塩の宇津野に移されます。当時の姿が残るのは新宮だけで他は慶長会津大地震で倒壊。

昭和四十九年に再建。間口二十七メートル、奥行十七メートル。四十四本の柱が建つ寝殿造。東北最古・最大級の建造物。国重文

地震の直前、殿様の所業 虚空蔵様のたたりか

地震直前の慶長十六年（一六一一）五月、『塔寺八幡宮長帳』によると、

「蒲生秀行公は、柳津町出倉（柳津の虚空蔵堂の上流約二キロ）の揚（あが）川（只見川）で毒を流し魚採りをしました。その魚が集まった所を「魚淵」という。神仏をおろそかにした祟りにより八月二十一日、大地震があった」という。『会津旧事雑考』には、

「慶長十六年夏（一六一一）蒲生秀行が遊戯し、毒（柿渋や蓼（たで）山椒の皮など）を揚川（只見川）の上流より流し、下流の里まで魚が腹を上に浮き上がった。揚川のその場所を楊津（柳津）の魚淵という。この魚淵に上流から毒を流したので、皆死んで流れついた」という。秀行公は慶長十七年（一六一二）五月十四日、三十歳で死去。

図・写真・文 ©石田明夫2019
問合せ Fax 0242-24-3423 090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索